

曉齋畫談外篇

卷之下



巨勢之

如空曉齋所藏硯

子 4

199

4



門子多
號 199
卷 4



曉齋畫談外編卷之二

東京 門人梅亭 藝史 編集

○曉齋氏信召一遊歴す

梅桜花の色々咲けり 霞ふ島嶼小涼 如く風子素 露 潤 潤
を機と做し 曉齋氏ハ 終るる 曉齋の信 曉齋の 雲 霧 霽 霽
岩小咽び 瀑布玉を吐く 深山の風景を 観 観 観 観 観 観 観 観
得ん之を果すハ 信濃路 ぬれずと 思ひ 居 居 居 居 居 居 居 居
遊人として 筆墨試の 外壺の 椀具を 準備つ 同志の 門弟 杉本 杉本
吉小光と 負也 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦
通りと 板橋 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸
是れを 數回 往來あり 且 齋 齋 齋 齋 齋 齋 齋 齋 齋 齋 齋 齋 齋 齋 齋 齋
馬小居 睡り 今 詔に 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢





信州萬葉時圖



筆捨る
 や
 景
 手も
 信濃路
 の旅
 壺
 田橋

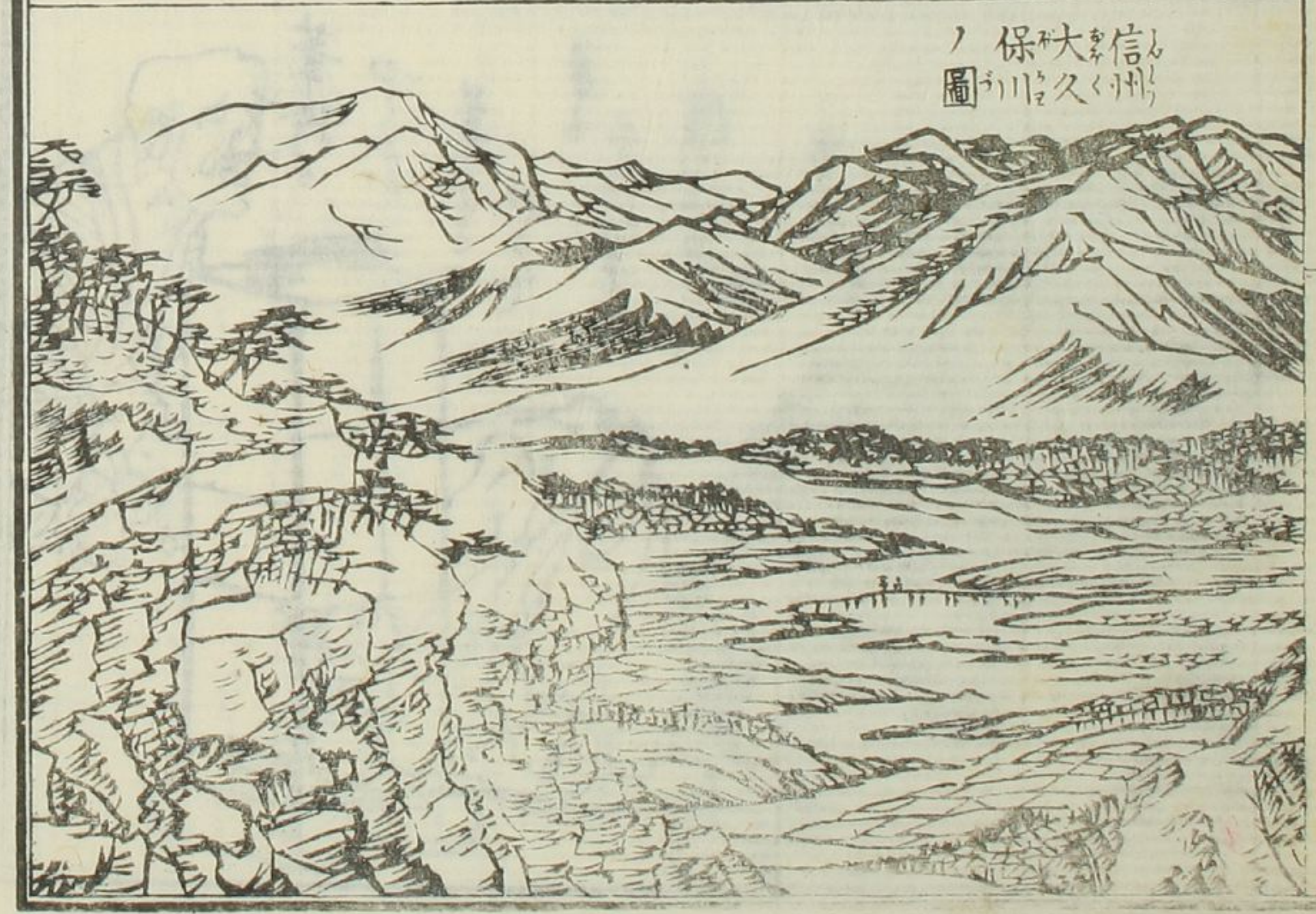
時
 同



上州外山景
義州真

路小掛りたる小末持捧名
 山々近く浅間嶽の煙さう煙
 と及做せぬ景色不目馴ぬ
 望面おけきを懐中硯より出
 路辺の芝生に御投り
 並枝の根木腰掛を真景と
 穿し終る小間費之五里往白
 もあり三里歩く旅店に着
 り日や有たけり特小板鼻
 驛の外きこり回國を有名
 の奇峯汝小妙義山と呼ぶ白
 うんざり望めを連雲吟嘔し

項上に 律元立たる 岩石の如
 りとらぐ如く 勢多なるが如き有
 りて 冥ふ奇異の 形状を有した
 べきを 人同界ふいともあらざと
 思ふ程の 極めある 故別園を
 一を 示すお出せし 期て 信濃路
 越えたる 高峯峻崖 四面を圍
 りて 庵を 廻せし 如く ありふ
 べ 何れも 不意を 挿し 何れに 思
 ひを 止んぬ 迷ひし ちぬ 計りあ
 りし 先 万字頂の 眺望を
 望む所 又大久保川の 遠き系



信州大久保川圖

を 換り 程 同國 佐久郡 あり 亦
 一の 美観 と 稱せらるる 布川
 山 釋尊寺の 真系を 穿し 穿
 りし 山 小巖 小溪に 流す 衆
 小 林に 目新し 思ふ 所 あり 子
 小 任せし 矣く 拙き 挿し たる
 ども 標 数多き 殿を 餘に
 省き 裁 裁せし

○ 曉 高氏 松を 穿し せんや
 一 條多し 挿せし
 呼ぶ 所の 同國 小布 絶 絶し あり
 井三九郎 とし 人なり 福



同國佐久郡山布川圖

外二

曉齊氏松寫生圖

惟時書地石圖

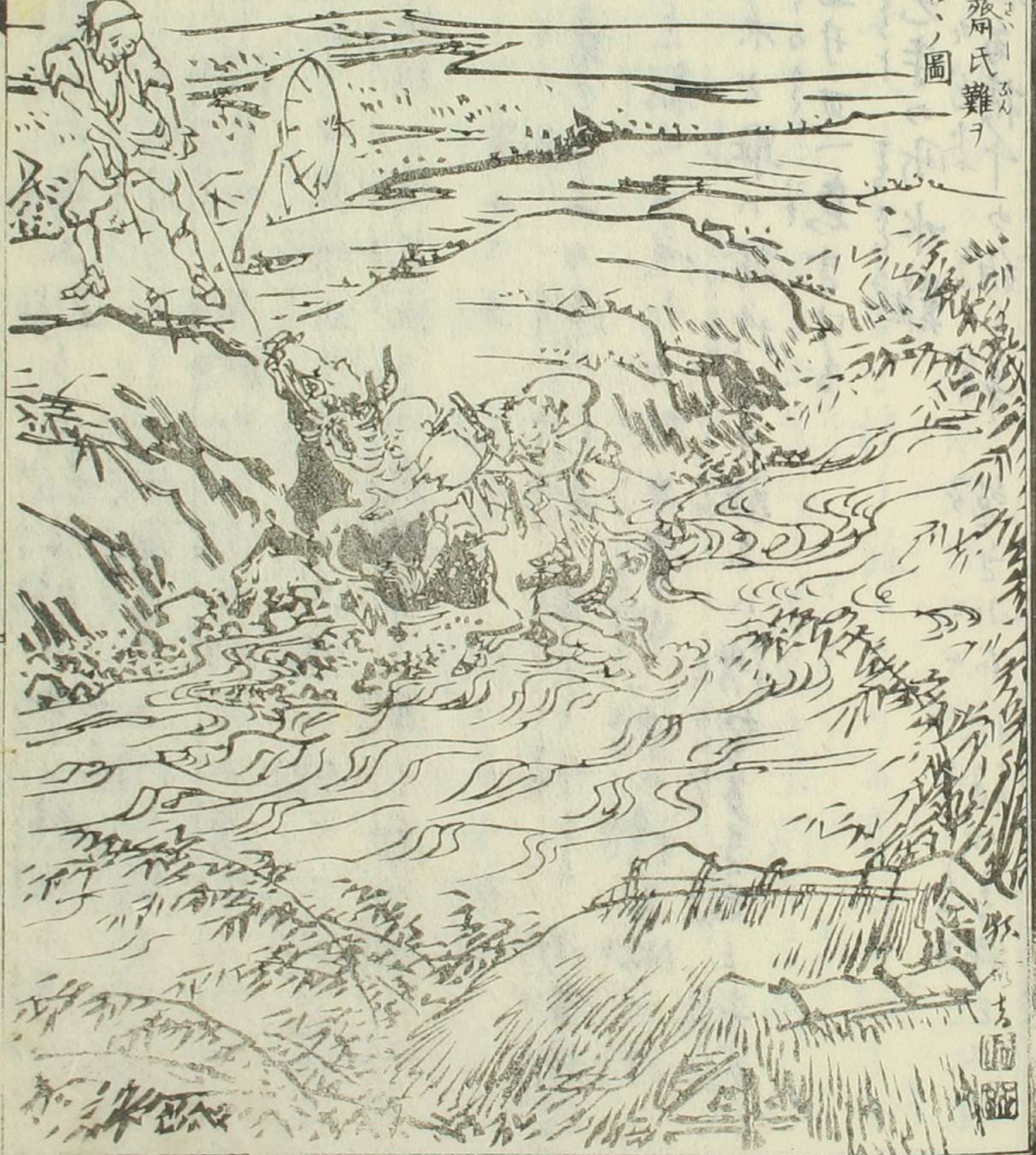


の知己や名を家を訪んと涙
板の所を踏し小布抱一紙之
んと彼方此方の家の處お引
是行しに昨日天長閑ふ風
澄如ありけきを松の葉に
掲るる吉と語しは向ふの
方に松の大木ありて振る交
したる枝を少摘おゆと
見ると風景澤々言れ松
を傳の明地に這入り火
お取し出して笛をふり包
の木枝竹おを集めて焚き用



妾の瓢の酒を瓶に換へて温めしめ自らハ草擇り出せ松の
 宮中に能合ふま折らう一人の野蠻男出来しヤア〜海軍
 ハ己の地所へ火を附たふ了筒せぬと敷園や急噴言成し
 負ぬまにあり候令其方の地所もせし圍垣多けせハ区路
 の明地と言せも果さば彼の男が何の酒造さハ此所ハ松代
 領を越出〜と連函しハせぬ待て居をれと言捨て来りカ
 へ走往〜がむるまお焚火を消させ片付けしち松の園ハ換
 り果たれども戻りて来ぬや急還有と當る處を徐不出し
 一所不どはと掛差屋り〜此処より客子を聞くと立入り候
 柳けり所番の志保に酒を話〜客の事を問と志保ハ茶を
 汲〜来りし云彼ハ權十と云當村おきたに居る權十の悪意
 馳往〜ハ伊豆を專せ来りお金を擡り取んとて〜人此處を

只空然 曉齋氏難ヲ
 けき給 逃ルノ圖
 必ず罷小掛
 らんと聞ま
 曉高氏ハ苗
 若小目配せ
 して其様子
 ら元の所ハ
 戻りて待ん
 と茶代を重
 つ其処を立
 出り

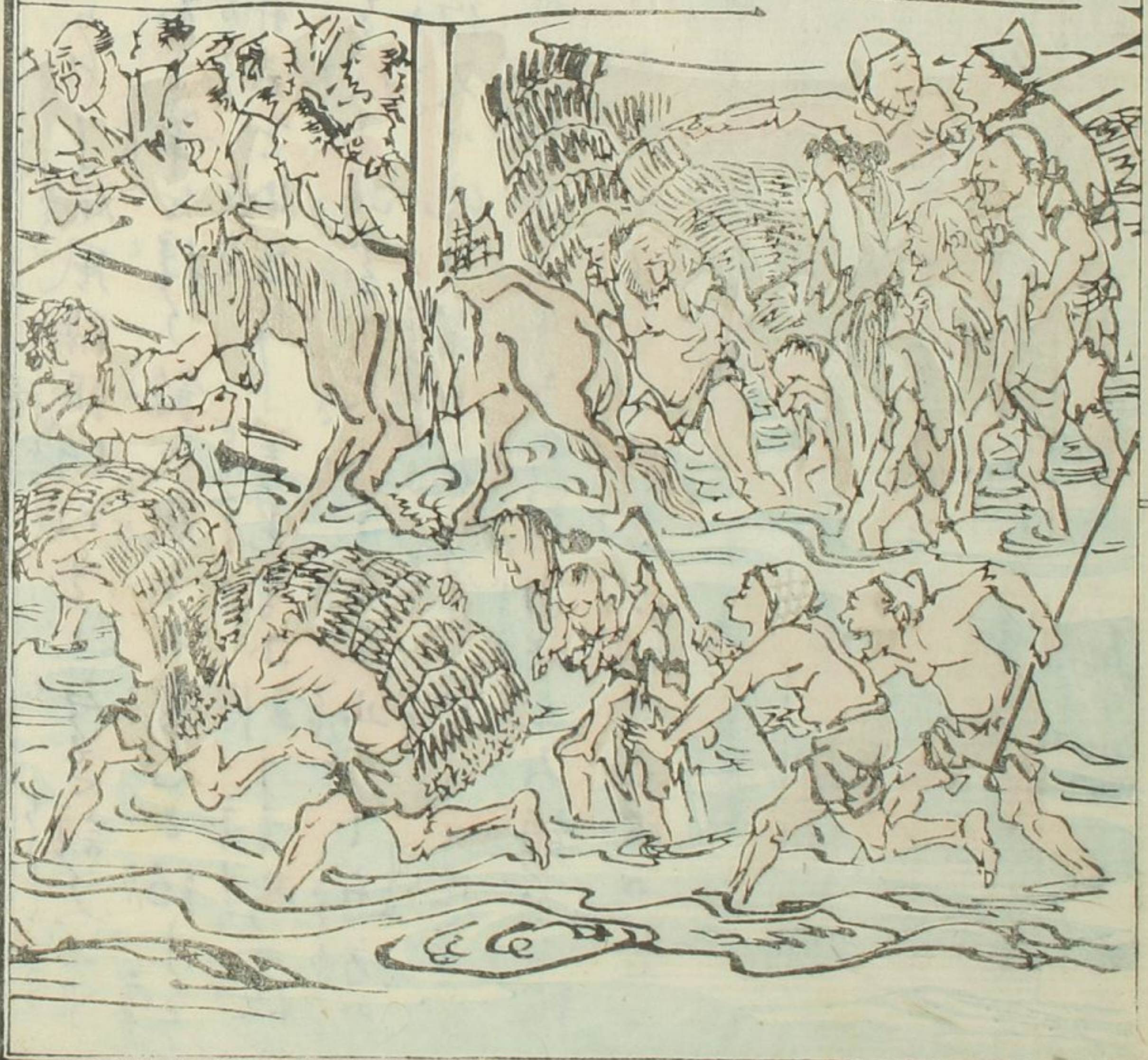


為法に影の見えぬ所不到ると新木林の中へ横切り道を通り
葉をふけけと半斗りふりて水勢もき小川の端に止
り苗名流とも滔息吹て居折から川の向ふ小道ありて牛を
牽つて来り若ある由急呼止て及ぶ一不伝を語せむまハ穢多
の権十とて此処より名取りの悪僕より早く此所終く川を
渡して進んとして牽たる牛一死来り口流の急を越来りま又
牛小曉苗を乗せ向ふの道に到長一牛より下りて小布抱持
一出る道さそ教くらせたる故牛牽男に此の種を做し招の
國ハ書取るれど耻ハ捨捨り旅ハ滑勢多き者と打笑ひ
小布施の馬井方一急むける

○善光寺の水難
曉高氏ハ穢多抱持の種を幸々進せ小布抱持の多井三九夜

方一到りし小引留られて屏風隔紙河へせとそき語又小果
一有ら移む七八日ねど筆を揮り餘ハ戻り小書人と約しを
遊る如くふりて高井方を出立たり善光寺不到りて所の位
液屋小右衛門の宿を投じ此室小久く足を止めり近方の
名所古跡を寫し歩行又ハ他の高き懸ト筆を捨てて居り
ち小西洋人が東昆の一季候とす五月間はごろ頻り小傳
り出たふりて三四日ハ小止もせまるるありて廿五日の花
り同六日同七日ハ朔ヲ下強自空を傾るが如くありりり
善光寺の街あ迫き筑摩川の激流忽ち海をり一數里の間小
澄れ掛まり抑筑摩川の佐久郡金峯山の北より出る川と東
の方より峰より出る梓川と伊倉のふあて合合は久小縣の
形を當き河中島四郡の境をりり又厚川の駒が嶽より出て

筑摩安曇更級
 水内の境を流る
 摩利の境を流る
 郡の境を流る
 後の新河に出る
 信濃川とも呼ぶ
 一と二と称せらる
 者故霖る中
 雨と山の水
 下小押出
 一と二と称せらる



材を一面の水と
 あり渦巻きて流る
 劣ひ漕のちるがみ
 るまの家と流るま
 と殺るれをと流る
 けられ相援けを
 る様実小哀れと
 なるも嘆く富氏の事

善光寺近傍
 洪水ノ圖
 修三伝書





信濃州戸山圖

を安き豊廿八日の朝尚吉と連れ佐あ屋小右衛門が粟由小
 見物おはきたる故其場の有様と字一取うたせが比処小
 知しと看取の覚おはす

○睦富氏戸隠山勸修院お招得せりる

信濃國安曇郡戸隠山の善光寺の面北五里お在り奇峯峻岳
 とし屹立し越中の連岳西小聳え也ふら妙香山半ひま
 南面東方山ありざるのあり尚山の中院の思魚命堂光院の
 表壽意真院を奉力推命地主神の九頭龍権記みへお當り天
 台齋院院西界山顯光る三谷一山の坊舎三十六院回社領
 多石造管料三百石石匠車料八十三石の大社ありは中院の
 本社を建築し既お成るれども天井の繪と書すま
 考す一山の衆徒頭を悩ます事久しうう小睦富氏が善



信州戸隠
荒谷之國
養元其月
廿四日

郡同

之界山

荒谷

光寺小左と聞き三十六坊會議して遂に不當勸修院より使
 者と来らしめて迎へけしハ嘘言を捧納し書人ことと肯諾
 茲に頼まき詔の掛り一画の皆お捨置百本松を留言と
 引き連れ戸隠山の不當勸修院より往たりける折戸隠山の
 其麓安村より一里登りての坂交り又一里餘登りて飯
 繩系の鳥居小到り一の葦表より中院まで五十三町中況上
 う奥の院まで三十町あり嘘言の勸修院小来りてより毎
 夜水子洗の泚の末涿小灌りて後松孫史も暮りハ止しとて
 往き得ざる三十所の嶮岨を攀り奥の院平力雄の社小集拜
 ありたり茲に又勸修院の中僕小菊松と云ふ若者あり一夕
 べは事ありて後またるる夜更し奥の院の神燈小油盛んと
 松明を振照し岩山小名有り大木の位杖松ありと生知り至

信州戸隠山ニテ
 晩齋夜中奥ノ
 院寺僕菊松
 ト途中奇談ノ圖



さう暗き九折坂を登り往し山の上より来る者あり其
ありり相明を揚て是を足れを眼見くと光り鼻高くして
口を做したる天狗ある故キヤツと一聲叫びて作反倒たり
然るに菊松うす物と見えたるは暖富氏が其の境に多話の度
りある少が是も又泊りあるがう投おせし松の光りに倒
まし者の顔を見れも少男の菊松うす故抱き起しし涙を吐
し果ハ笑ひて別れたるは此処小園せし其時菊松の自みハ
斯くもととの姿あり

○中院神社の天井に龍を畫し

戸隠山の中院ハ近國と云ふ大社ありしを拝殿の天井十間四
万のり暖富氏ハ天井に描んとしし再龍奥院に多拝あり結
龍既下濡れれも一山の望みお任せし筆を挿し小燈一と十

六坊の神官侶侶ハさて置き近江近江のくまや間津見
物お来りけれハ本社ハ宛然人より押めし如く有り暖富氏
先三合りの大盃ハ神酒三杯を傾け十間四面の天井も頭
一ツより挿し程ある大龍を描き出たきを看官見ツくと
計り鳴を鎮めて見たり暖富氏ハ此龍と一周間おしし
畫き上げれれも一山のくまや又清て龍の周圍の合天井六十八
枚と描き給もれ是ハ奉納ハハ為せば謝禮の金ハ望み候す
杯と言て迫れども最子戸隠山の風景お飽たる故去んと為
るに許さずと捕掠おしし六十八枚の曲道ハ八枚書せら
きたり然もとも雪降おてハ明年の暖氣お成さハ下山お来
ふと聞き跡此処を走らんと計るも別當所より兼て門守お
言付置ておさび因て苗吉と相談しし密お存候一おし深夜



庭の崖より下りて逃げ出たるが他家の裏口へ付當り
如何とも詮方なきを元來知まざる門前の腰掛茶屋故呼起
して話を話し坊への内証で出し呉よと情めを陽子足肯
陰小別當所へ告しりバ忽ち小又引戻されたり然れども
彼是と不都合を言ひ立止るべからざるを承しければ三十
六坊協議の上

當山中院天井画沔捧納之處時季冷季は揮筆難き成依々
来陽山望山皆成の様奉形の上

八月十一日

河鍋洞部板

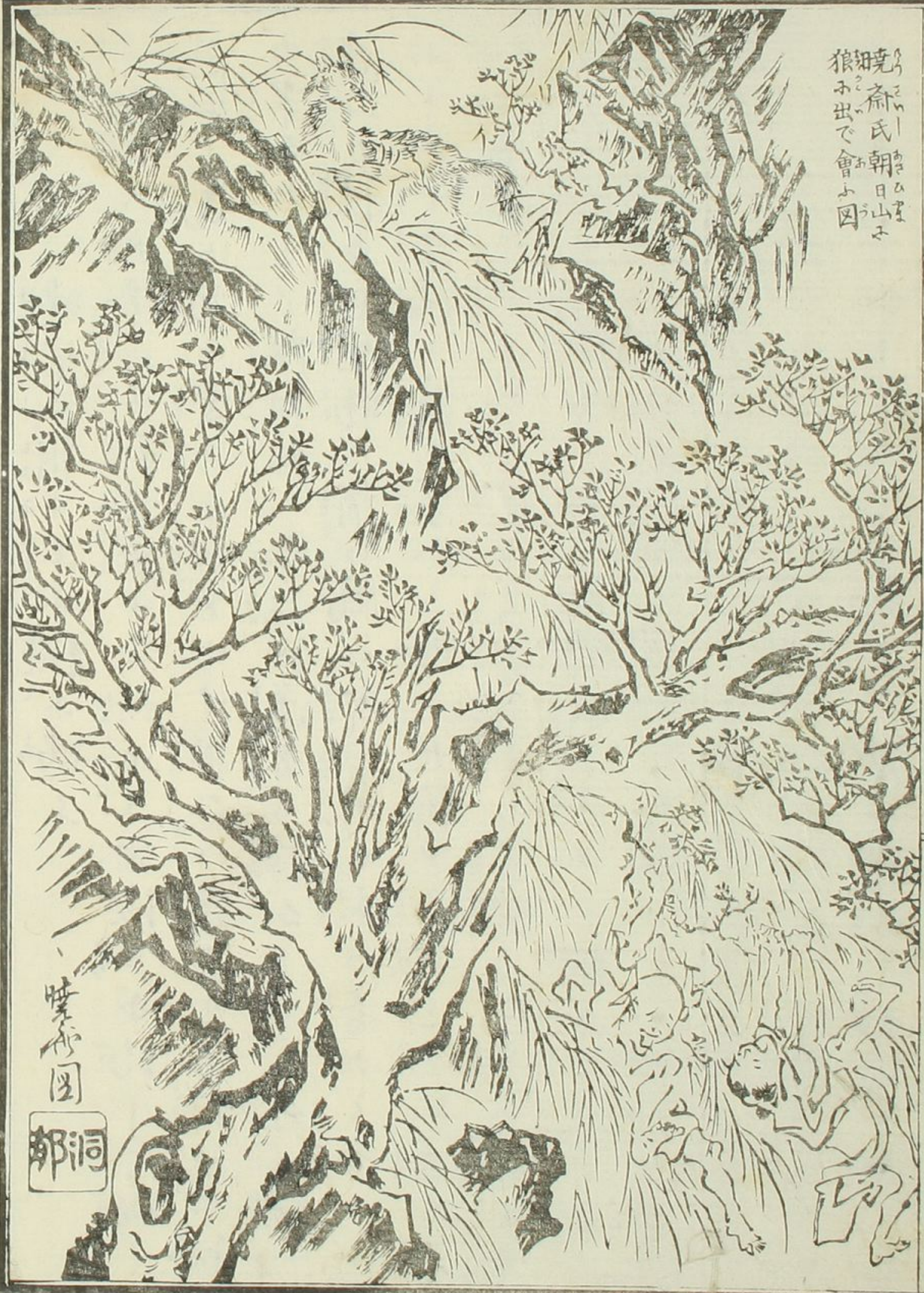
戸隠山別當所 役者印

右の書付と共一漸下山と許されたり因て戸隠山中院の合
天井の画一物ハ枚めて六十枚ハ今小未地なりといふ

○曉齋氏朝自山小狼小遇ふ

曉齋氏ハ戸隠山の別當所にて引止るを後日小約して漸く
逃出し麓の鳥の雲井小羽をのす思ひハ為まとも時既小秋
の半あれを戸隠権現へ参詣れ道者も稀かる由見え物ハ
満山の秋の色聞物の梢の風の孝谷川の水の音のよある小
淋しき十寸穂の落小塞がる九十九折を尚吉と共に走るが
如く小して下里たり寮小又善光寺の本堂より申の方小當
甲て山花山と称するあり所謂朝日山小て朝日右近と云い
人の居城より一変最峻岨の悪地あり幸うして曉齋師弟ハ
此山小出猶峯少漏ひ岨を廻り羊腸たる細道の曲り角小て
計らず彼方より来り一獣小往合何の氣豆一不足と見ると
目を金糸と放ちて丸く口耳を裂け骨太く毛針を做した

曉斎氏朝日山子
狼お出で會ふ因



曉斎圖
郎洞

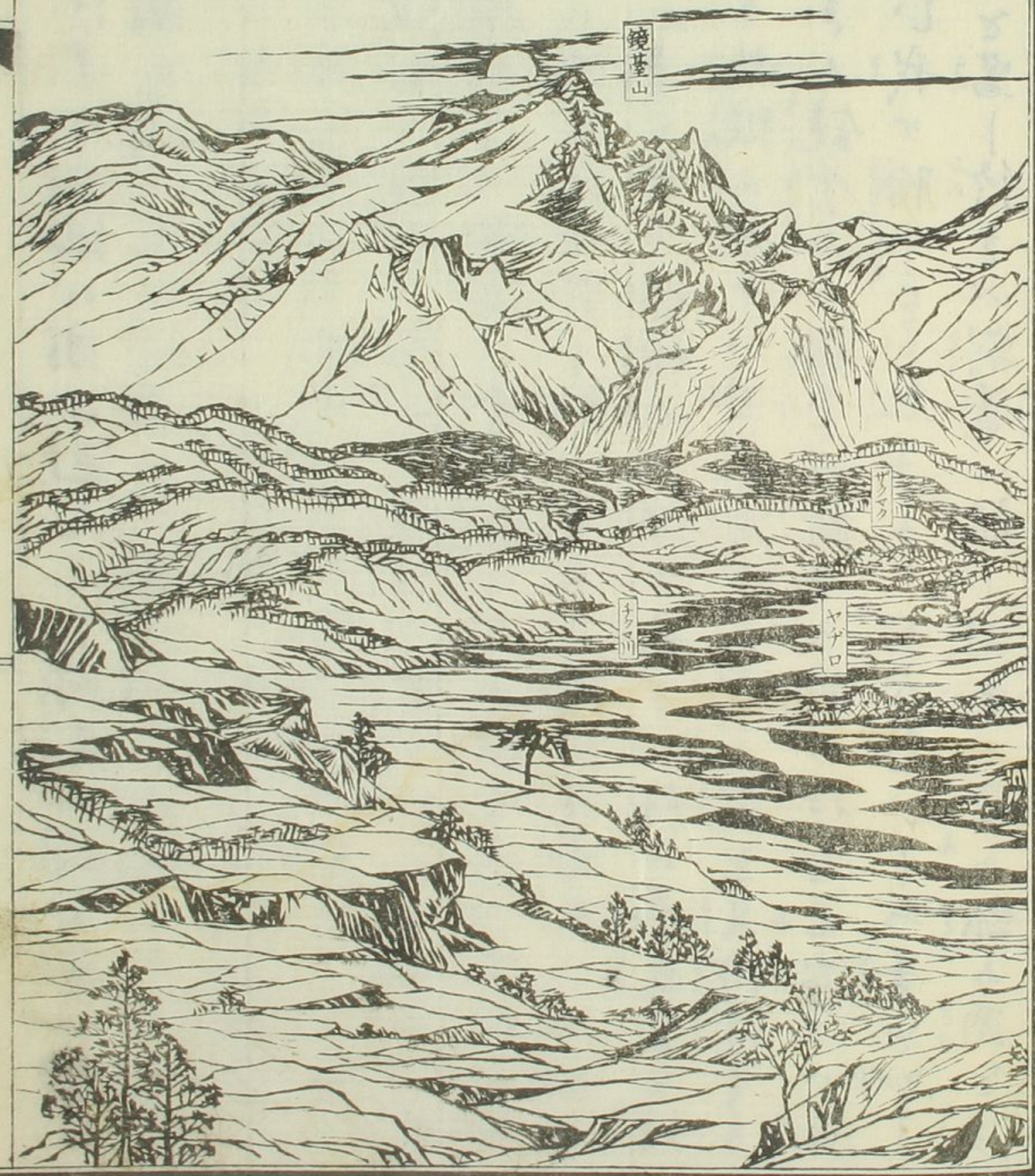
外二ノ十四

るハ縁下画く雲の狼おれが愕と驚くと膝頭が夕一震ふ
 ハ苗舌も同トふて逃人と一ても足居らバ苗舌さまへ崖踏
 外し傍の谷一轉り落ると續いて曉斎氏も折げ込む却合
 小思しぞ叫と言と狼も出合頭あるう驚きたる様うを
 廻し逃往きたる故二人を怖く木の根草の蔓お取うけり谷
 かさ色一這上り四辺散眼し今小を再び狼お出来るりと
 怖しつて人家ある方へぞ急ぎける

○曉斎氏更級小油屋五郎右衛門と月と見る

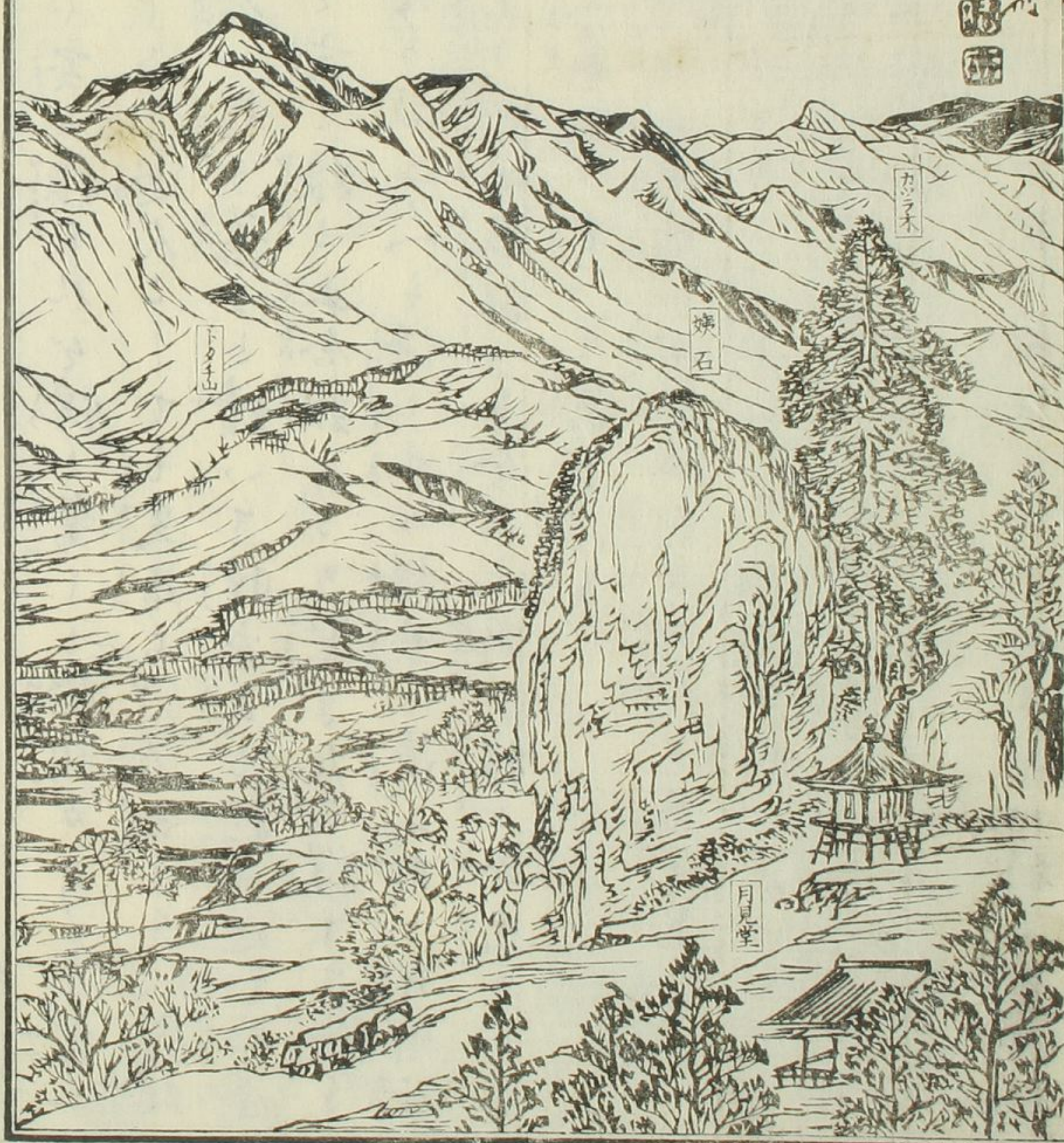
善光寺より杉平の方へ四里小し稲荷山驛と言ふあり高
 家軒を連ね市街繁昌の地あるが此處小住小油屋五郎右衛
 門と云人の風流閑雅活々画を好む癖あると以て曉斎氏
 を招待せしが時秋の最中あり十五日小ハ特小室曉風

放光院長樂寺
月見堂の図



外二ノ十五

修善寺



静りありけきバ更級の月と見んと同志五人を集め晴高
氏及び苗吉と誘ひ申の刻頃より姨捨山へ出掛たり拍更級
郡姨捨山ハ稲荷山驛より一里と距り所ハ放光院長衆
寺の境内小月見堂あり當所の十三景と云ハ冠山。更級川。
田毎月。桂樹。姨石。甥石。宝ヶ池。小石。鏡
臺山。有明山。一重山。雲井橋より眺望ありて歎ひ稀
なる勝地ハ又の総丁能く知る所あり再説晴高氏ハ油屋五
郎右衛門小連らきて姨捨山へ往て見るに稲ハ今花実を結
ぶの時ある故彼の四十八田小宮ると言ふ影を其傍園を
小々由ふまの鏡臺山の鏡臺小抵より月の鏡を足たるハ画
術に苦しむ我が胸中をも思さるるの思ひ一筆とて
了其真景を寫し終きバ割菴一話し用意の肴ハ瓢の酒を傾

けつ詩を化しむと吐き果を子と松謡を唄ひ衣をいつ
る置露小濕るも知らぬ月を賞し居たりし若ぬ眺望の
面白さ小一人が今より直小善光寺へはて姉娥の様な女芸
小酌を取らる終夜晴高氏ハ陽系の別宴を開き快を考さ
む々如何かと羨まされバ五郎右衛門を始めとて丹ハ面
白いと皆同意ありて又より猶歩行し盡の取り遣るハ瓢箪
空とふせバ酒賣家を見かけ次第小立入りて之小次せ酔閑
ふる小徒が興ますく多く夜半迄の頃ハ小遊小善光
寺に至り同所より一等と稱せらる割烹店北村屋忠右衛門
が門の戸叩いて既小森たるを呼起し油屋五郎右衛門志達
あり晴高氏苗吉を他五人動也といとおして姨捨山から
又捨らきて中処小来たれを傾く迄の月影が見えり狂歌一

通しを呉ふと言ちらし案内小
 引きて席ふの即ども道の旁ま
 と酒の酔ふ堪うれび皆その俤
 小假寐して枕みせられ夜着掛
 らるも知らず朝まで眠りし
 が一人目覚まし二人目覚まし
 目覚め者へ引起し嗽ぎ顔洗ひ
 ろと下一回座ふ即と女共が
 持出た酒肴み頃我今日ハ昨夜
 と遠い尋ち敵め美姉が者ぞと
 て飲ぬめたるが曉高氏ハ元来
 自ら許し程しと名乗る人其



他由亀の子大蛇負お芳らずの
 上戸ふまきバ蓋ハ宙を飛び徳利
 ハ尻と居る間あく酌取ら女ハ
 是が為不可惜袖口を切らすお
 ろ一斯きバ何もの勢ひ小業
 善光寺小居らたけの藝者を
 呼下来ハ味線が弄くハ社ガ
 浮ぬると社頭め坊主下引ハて謡
 を唄ハ踊り興トて騒ぎける故
 其日の夕方ハ皆大酔しつゝ泥の
 めく小成りたりける

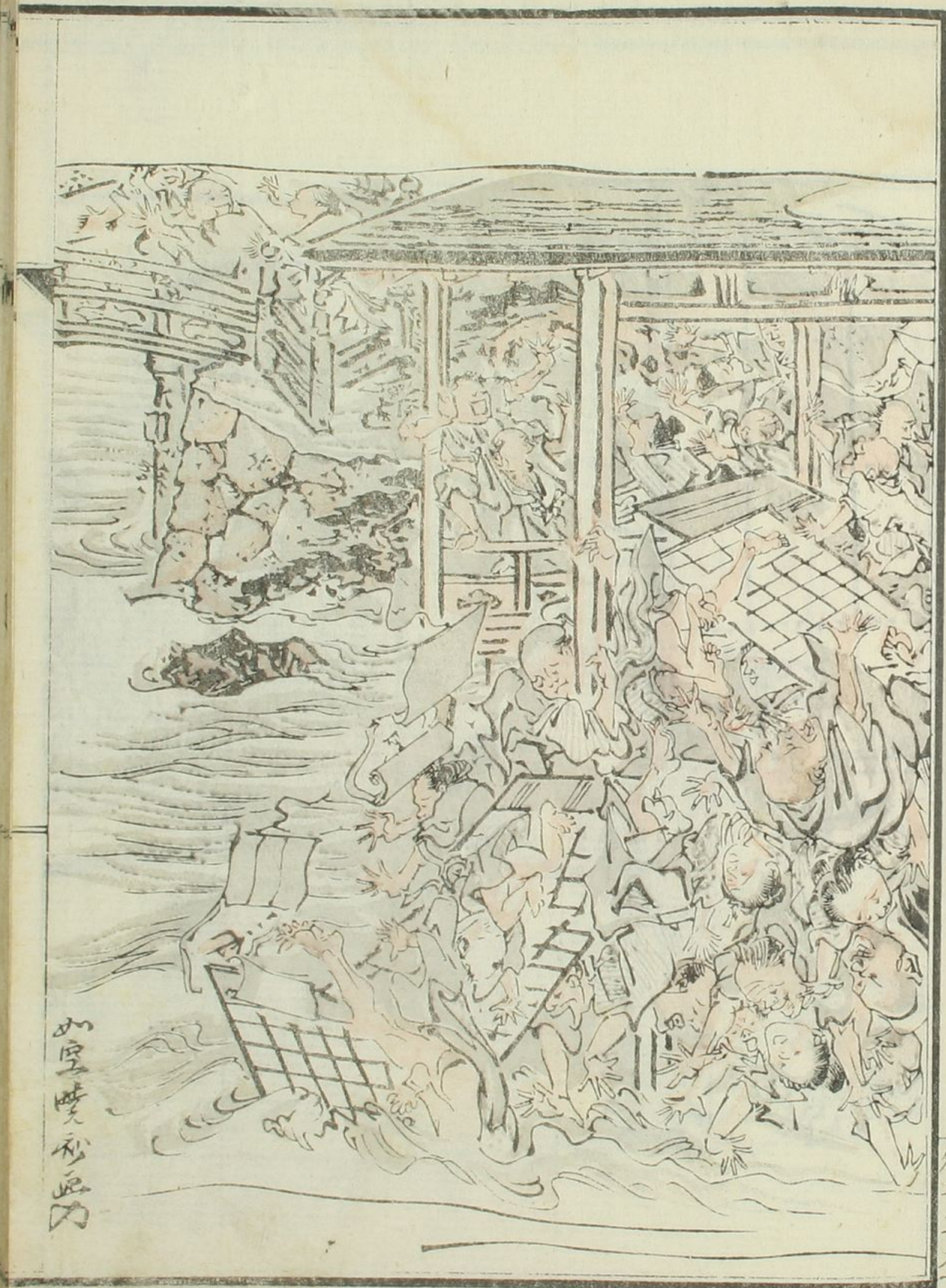


曉齋氏油屋五郎
 右門と北村屋對面
 店酒舞の園

○曉斎氏乱醉狂筆を採ひて捕縛せらる

明治三年十月六日。東京下谷不忍雜司天の境内。菅原村長
吉方少将に倅人其角重雨控ふる。若畫畫會を催したる。小曉
斎氏に酒飲連るると。以て席上の揮毫と稱す。朝早くか
ら書画の會遊おほし。小會も頗る乱碎の名を得し。若故
來客の顔も見ざら。前より子益と廻ら。徳利の底を押
つて。飲殆めり。色む人集り。群々として。宴を罷り。頃小既小
三升餘の酒と傾りたる。故咲言。元ハ醉り沈め。如く。既小
も氏小酒氣あり。龍の雲と得たる。が如く。席の底も遇る。小
以たれば。是も身体も愚弱。く。あて。社少限ら。きぬ。狂る。れど
も筆を採ひ。ば。益活費として。奇い。妙く。ある。物と。ま。出。ま。を。人
身。一。扇。ま。の。茶。碗。と。る。一。紙。濡。れ。ば。舟。と。着。一。べ。り。ト。一。小

酒を造りて。深筆を採ひ。り。れ。ば。六升飲たり。七升飲たり。氏ハ
鬼灯授燈の如く。み。あ。れ。ども。筆を採ひ。て。屈せ。ざ。り。折。り。傷
あて。高。ぶ。り。中。原。ま。者。あり。今日。王子。迎。一。集。り。たり。小。外。國。人。を
騎。乗。切。り。み。り。素。と。茶。碗。の。若。出。む。り。く。け。ひ。の。西。き。ん。あ。る
りと。向。と。馬。席。を。兩。人。召。一。通。し。り。答。つ。たり。と。云。が。身。小。の
り。波。号。子。笑。して。遣。んと。思。ひ。長。長。の。人。物。小。二。人。し。て。席。を
履。せ。居。り。伸。と。画。き。又。年。長。遠。の。人。物。大。仏。の。鼻。毛。を。後。と。る
様。と。画。きた。り。し。小。画。体。言。貴。の。人。を。嘲。弄。せ。し。物。と。認。り。其
座。小。於。に。官。吏。小。捕。え。られ。し。り。バ。席。上。の。酒。類。駭。動。の。圖。小。歌
い。せ。し。如。く。あり。然。れ。ども。此。と。き。醉。つ。よ。く。一。言。一。語。小。至。り
目。ハ。動。く。と。ども。四。辺。朦。朧。雲。霧。勢。の。中。の。如。く。あ。し。く。物。の。何
たる。と。名。を。分。る。事。能。は。り。や。口。の。笑。け。ども。舌。廻。ら。され。む。詞。を。出

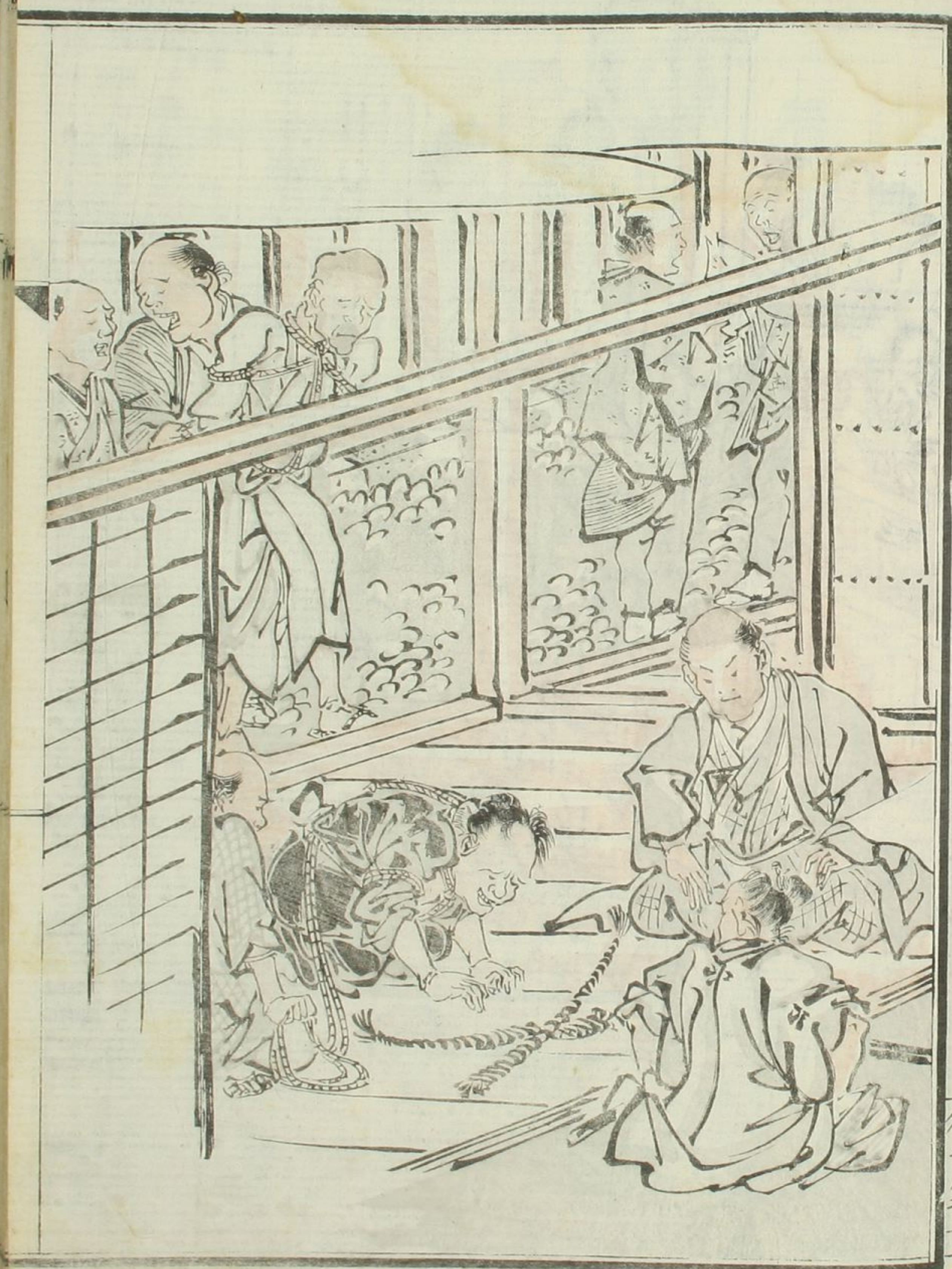


如皇貴公此乃

外二十九

上野不忍岡
三河屋ニテ
其角堂書画
會ノ席狂齋
縛サルノ圖

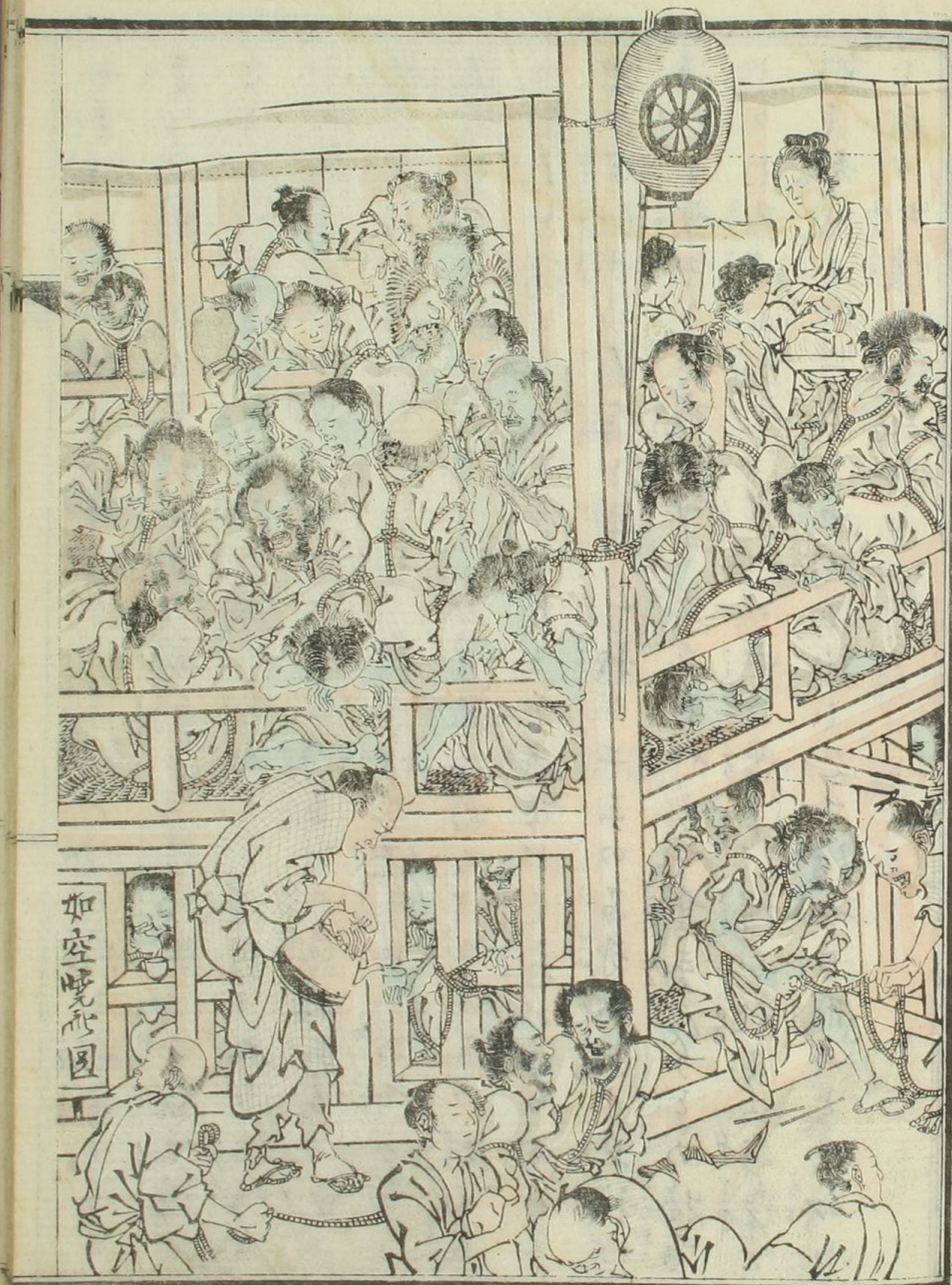




外三ノ二十

其二





如空院

外二ノ二十一



明治三年十月
晚奇氏東京
府の獄屋
の轆轤の

其と性のみ只踊りの身振りして引きけき終ふ獄舎下さ
またり躬く彫く聖教あり酔醒その事と聞て千悔万懺
まども詮業をけきい只只結の外をりし同月十五日西呼出
し小成る右の正統し有たれども何事と云ふねあるも更
堂之をれむ地の正統い為し難き由と述まのハ山下とあり
再々禁固させられたりしづ聖年四月三十日あり彫く友
の赦免と請て喜天志のと見ると得たれむ忘れさら四ひと
思ひ牢獄中の有様を圖し我が二三の予身小一但我ら
酒狂の業ぞろの戒めゆも者さしわとて書室たりとの揚有
しりむ其清ふ出して牢獄の中の苦し此様を記せし文章を
以て聲せきは二三の画圖に附て見せ後世の戒めとも成ら
む氏に中懐あらんのこと

○曉高氏博覧會の鳥の画と出す
明治十年初友東京上野公園内由小於て第一博覧會ありし時
昔せし通り雅と出一畫百圓の空價と附たりし掛り首元
一餘り高價の由を以て難せり小曉高氏答て是ハ雅の價小
ハ何れも是より數十年の問画の爲し千辛万苦して當り得
たる所の價ありは友の係ハ天下の博覧會なる故求め人の
有無も流らず小清の正價と附たるありと言しりバ掛り
當も更あり止たり然る小を雅を日本橋西河原の葉子高業
を橋主人が買入たるハ曉高氏の面目ハ一々幸福と言ふま
之其後ハ相尋り難く遊び丸松進造とソノ人の業也少く好
門の正蹟を見物あり後曉高氏一人先來り新根川の坂
場あり近辺の風景を寫後日談話の趣も成んと持物として

曉斎氏博覧會
出品の鴉

山陰
郡



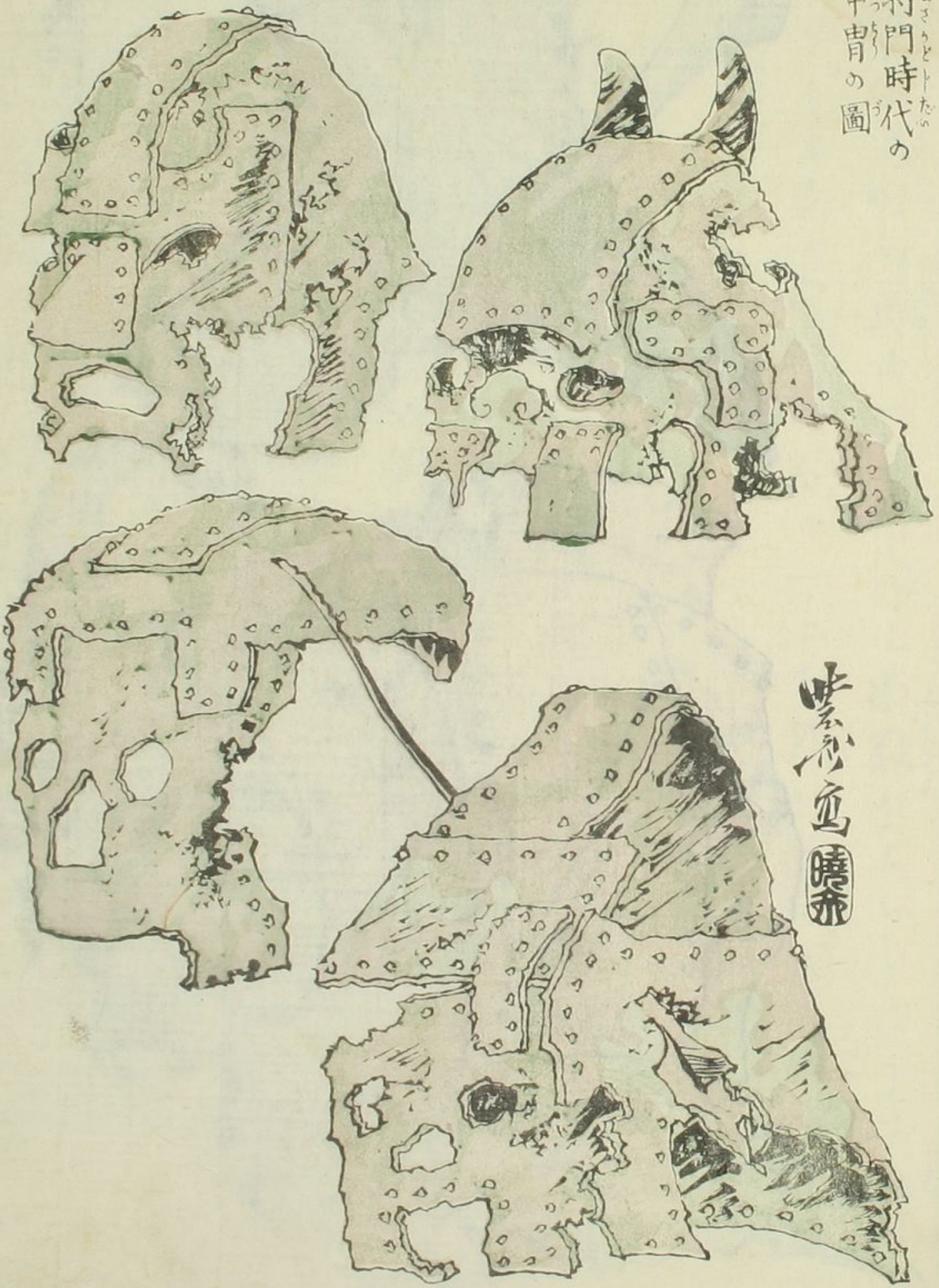
○平の将門の具足

曉斎氏存徳常野の辺を漫遊せしと此下信國を馬郡花野并
村少佐を丸松建造方の東向ありて其東その寺に寶物とそる
甲冑小を臆當及び一函の幕ありてこの平親王將門が用ひし
物と云國を其所持の寺に乞はれを一覽ありたり小穿小吉
代の竈心より一類ひをのびる物ありて縁を互に換當し
持帰られたるが當時代を知るの考証あり成んや思ふ故中
必し掲げて好事家の覽ふ備ふとふん

○英人ゼーコンデル氏

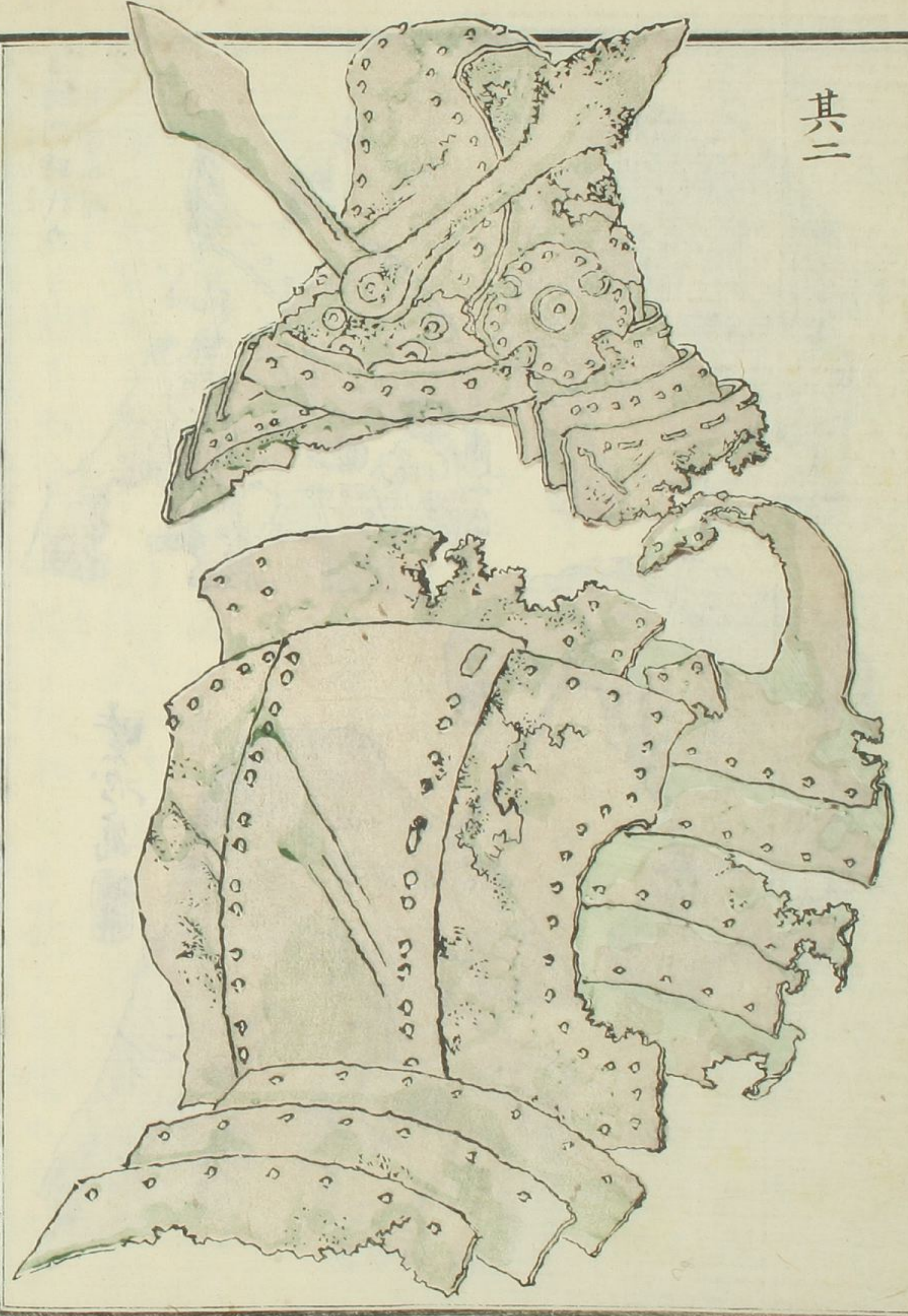
英吉利の人ゼーコンデル氏其本國小指り波の油画及び
國を引よる困苦あり大に精妙の術を傳たり然れども筆を
を又きる日中画を好むる相阿弥の画がきし驚採出の筆

将門時代の
甲冑の圖



紫心白曜

の雨中の鷲を屯しそ他種々の古画を集め餘暇あれば是を
 看ると上あき樂と做し居たり然るも去頃日中舟航し
 官に附たれば幸ひは時を以て日本古画法を學むんと思
 ひ當時有名人の画きし物を集め是を熟視し又熟考し
 たる後山口氏に依りて暁斎氏の門に遊さんと言入れ
 る暁斎氏之を辭しコンデール氏ハ油繪圖引お巧とあるを
 縁て聞及べり其人を教授せんハ僕ハ力の及ぶ所ありしに
 と再三陳謝したれども聽れど遂に師弟の約を結びし彼
 小後者ハ之より修く筆力息ち他とて驚く令るも至りた
 り且コンデール氏の做し所を察る小篤冥温厚しそ更ハ
 狡猾の所置ある事あり其後又伊予の皇族親王家と紅雲
 館伊序画とありし出會あり謂したれども毫も高慢の色あり

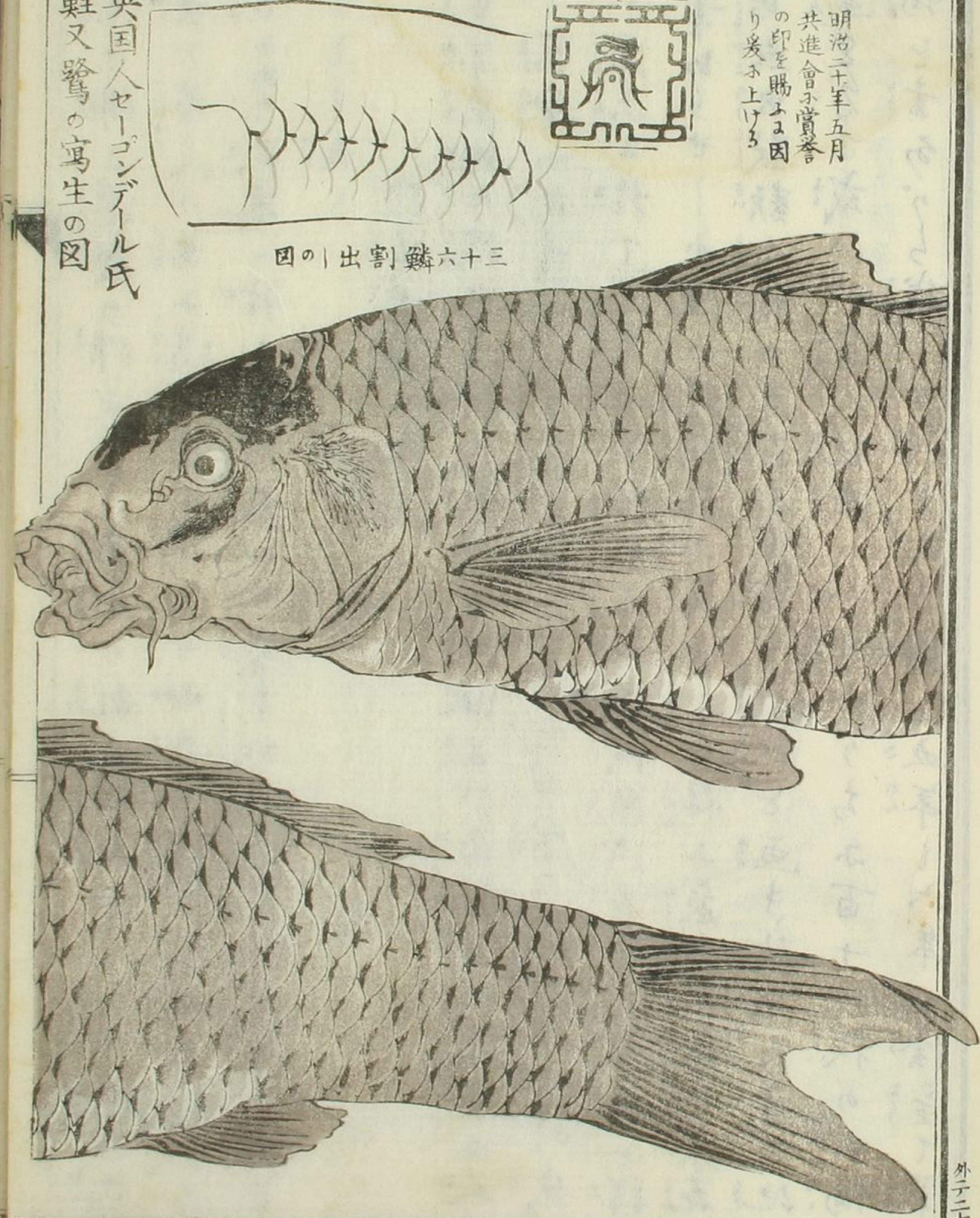


ハ突ハ文の風ハヤハリんと感歎サるらざりきたハコ
 ンテール氏ガ宮生の國の一二を掲げて我國人の為ハ
 与ス

○鎌倉新居間魔王の圖

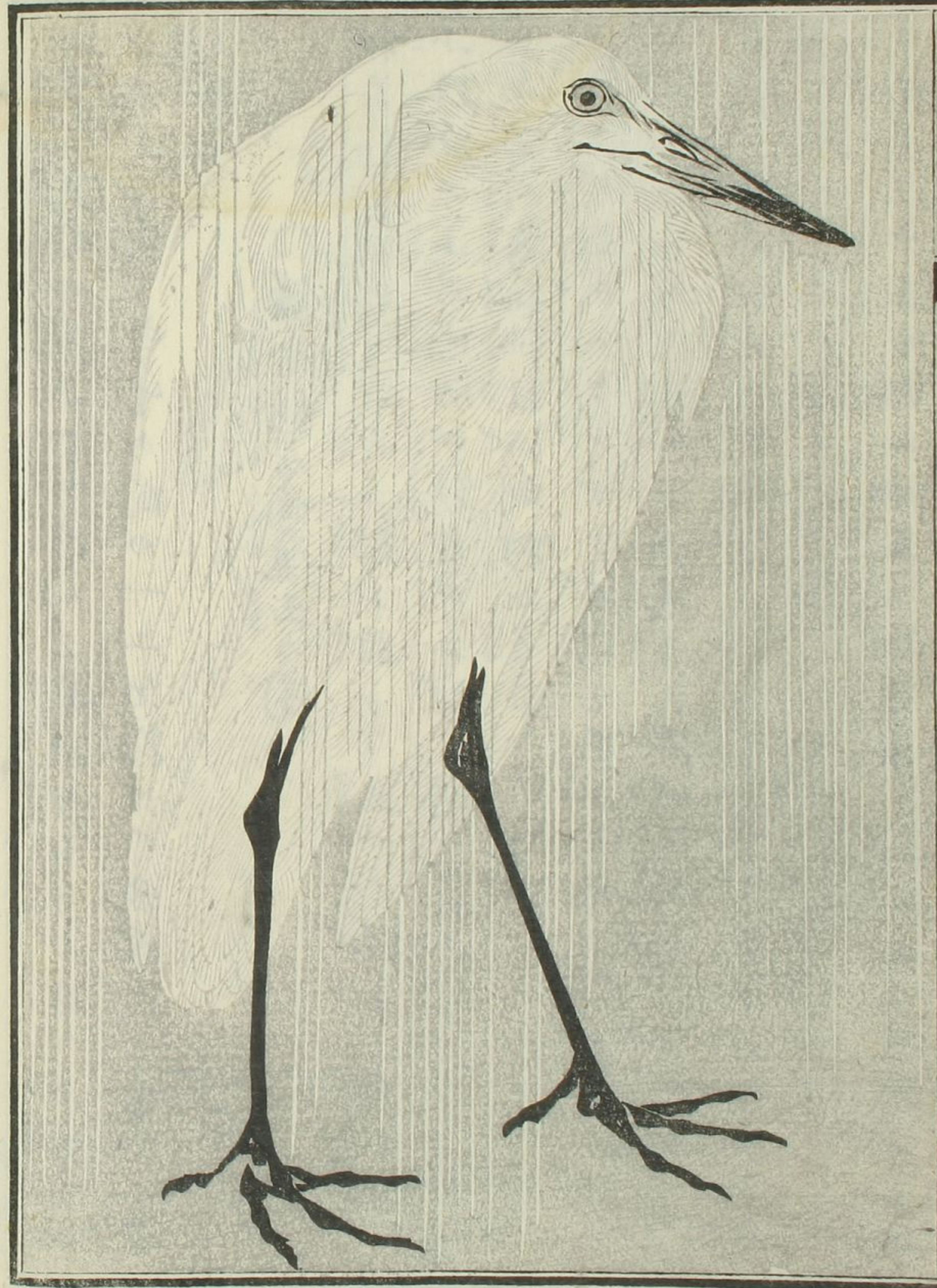
相副鎌倉郡鎌倉の古き都の跡トイ東ハ六浦西ハ編村南ハ
 小坪北ハ山の内の甲境の中ハ古七郷十井十橋七の切通
 あり名所舊跡神社仏閣持多きを以て其日たりと宮生
 さんと曉斎氏ハコンテール氏と共に地ハ赴き鶴ヶ岡の
 ハ幡神社を始め建長寺圓覺寺の古代の様式ハ寶物寺と宮
 一採り遠小新居の間魔を小到りハコンテール氏頼りハ其
 縁の異るる体と珍らハと賞さるると以て是と宮生做ハなれ
 今度ハ十王の曲の四王を出せあり抑新居の間魔をの十

英國人セーゴンドール氏
鯉又鰲の寫生の図



三六鱗割出の図

明治二十年五月
共進會小賞答
の印を賜ふに因
り爰に上げら



王々佛工運慶の作小く應永の乱に討死ありたる人の七
 君と昂人が為小造營せし物とぞ由井が濱の大鳥居の其の
 方あり又亀ヶ谷あり同名の閻魔をわり之も又運慶の化ふ
 るよー云り

○近邊館の席画

先年築地の深延遠敏の貴顕の繕紳及び若殿合評友貞の人
 寓會の折藤堂法雲福島柳圃河錫曉富の三人召れ其時氏
 ハ席上又於て三天中の繕地及花義紙練次等的大幅物と撰
 筆あらせし小僅ハ時間秘小其方々の好小應卜山水筆朱花
 鳥魚虫獸類人物の美おかく百十八枚と画き終せたまむ地
 是を乞て或いは言ん曉斎ハ一日のうちに百十八枚の大幅
 物をまゐりら我ら我ら我ら繪を五年も六年も捨盡て筆

相州鎌倉新井閻魔堂
運慶作十王ノ像ノ中



同



外二ノ二十七

同



同

明治十七年甲寅正月十日
於鎌倉新舟修野野地取



挿ふおろい何事ぞ纏紳小論ふふらざれば富豪小諷るふら
 ん画をまくの遅連の頼るふふらざれば富豪小諷るふら
 あらホ席画の時小臨んぞの慰るふふらざれば富豪小諷るふら
 後年に玉りてもお小席画と移る過失とらあも人も是
 を見免するありあるを家小在る筆を採る依頼の画の後年小
 長く結すづき物と思へば種小園を粟ト色く小巧化を凝
 其物毎ふ古人の筆意を採り得手し小基きて画けむ一
 枚の仕揚容易あらさるが故小日夜のちちる筆を取て寢
 食と忘るふ小玉れども愛飲の法吾より依頼と受たる物の
 遅延も及ぶい実小氣の毒の限りと言べ一然も之を如
 何とも做し難し思ふ我が考時あし十年以来依頼を法
 了書たり画の残り追ふ溜り其坊地のこふし一既も三百



延遼館御席画
の圖



枚不到り固一一枚を七日揚りとりて此は五のそり
 五年餘の同日と費やさぐれば画き得ると融けず況んや日
 こ子産る依頼ふ及一年殆ど六十小近きを以て餘八日こ
 減往の急書と書とると融けざらんりと或は融息しと物語
 らせま

○親世音及び天満天神を画く

今の世に至るまで名人上手と賞せらるる、性善の大家生
 達の画道の人小勝らん王と欲するの解り或いは神小祈り
 或いは佛に誓ひ日と一枚づつ天満天神の像を画きし若
 あり親世音菩薩の像と画きし世あり又ハ孫陀不動河小因
 らげ己の念する所の物を画きたるハ強ち小神仏の力を
 とし妙手ふふんとしハ融けず熱心の幸り方ありより出

暁齋日課小書
 天神の像



明元二年六月廿五日
 如空曉齋
 如五

同日課小書する
観音の像

明治廿五年六月廿日
如空堂主 都河



外三十一

る信心おして天神の像おすれ観音おすれ日
 乃史と夏形神と異し筆意と精して画くとき自然と妙
 所と得るの業おして淳をの人が神社に殿の前お賽銭と投
 三拝合掌して境内を祈る類ひと同トウらんや爰於て暖高
 氏も深く古人の日課法を慕ふより先頃よりして遂お事
 とまどめ人より依頼を受けて昔画の間にきおめても費
 難けれむとて或いは朝おく起或いは夜過く寝て観音菩薩
 の像を画き足を清き寺の観世音傳法流と上野公園内清
 の観世音又西京智恩院の観世音小同く十枚を納め又天満
 天神の像を画き本所亀戸村天満宮護国寺平河天満宮湯島天
 満宮の三社一同く五枚づゝを納して天満天神の尊像と観
 音菩薩の御景を水くせふ強し後々の画道お遊ぶ者をし

外三十二

曉高ハ之程ハ勉強出精シク丹青の業ハ困共為シたれども
 猶其画くとらハ斯の如まり実ハ画の道ハ容易あらざる
 物と言事と知らせ彼又一ツハ波の之めと形体ハ夏ても
 天満宮ハ天満宮親世言ハ親世言の縁ある故アリ物を画く
 されハ六十年ハ近き歎れども始めハ筆力と活迫
 ハハ筆力と技巧あるもの或ハ同ハありと試んと
 成リハ氏ハ如め画道ハ熱心ありハ流ク諸流の筆力を学ばる
 由るが今日を以テ池より其淵にところと見れば画術の
 妙変を極めんが為ハ古画を集むると以テ楽むものあり
 んりと一人言き

○二荒山ハ瀑布を看る

下野國ニ荒山ハ河内郡ハ小寺ヲ稱徳帝ハ神漢景雲元年苗

日光霧降游





同
含
滿
淵

晴
石
生
印

廿
二
ノ
三
十
六



同
裏
見
淵



芳賀郡の人勝匠上人始めて此山を采人として企て跋渉せし
 と湖したれとも路險しく雪深くして昇ると絶つ山嶺不
 止り居ると三七日を經て還りしが此年ついに漸頂を達
 せしや言ふ衆峯四面に深り峙ち其間は大湖小湖雜して四
 十八湖あり奇花異木奇人境に氷ざるが如し特に東照神
 君の尊矣と當山の麓に繁小築祀てより湯山の莊嚴その美言
 小絶を佛堂七室と銘め階砌探干不互るやで美譽し善書に
 の結構ふる故人送程の遠きを厭はずして此社に詣むる
 者多し多し其系よりハ三十六里を距りたれども今ハ上野
 山下より下野宇津宮まで二十四里を濬を歩いて走らすま
 一日ふし二荒へ達するあり爰に於て曉高の門下を英
 人ゼノコンデール氏と共に見れば二荒山不到り東照公及び

三氏將軍家光公の冥廟みへびらを在る壁天井小画きたるやうかく有名の物
 を與くコンテール氏コンテールと共に一覽して後又中禪寺ちゆうぜんじに登り湖
 水の風景を寫し又戰場原の廣漠たる様古々岩村湯いわむら湯の跡
 不とを餘さず寫し取り夫より又湯滝ゆたき般若の瀧たき寶幢の瀧と
 所有滝を寫し就中七十五丈を直下為ると云華嚴の瀧又寂光
 の飛泉とびいずみの高サ二丈許り小しこ瀧の三小不動明王の像立り
 景絶景あり裏見の瀧ハ二荒山の坤の方一里半むかりの西
 小して奇異の冥窟あり山を登り山を下りて岩の洞小入る
 冥窟屋の高さき丈餘瀧さ二丈むかりは処より瀧の中不出
 て瀧の中裏を見りあり飛瀑の高さ瀧さ何れも二丈むかり
 上小石傳せきでんの不動明王あり霧障の瀑布ハ二荒山の良三里む
 かり小なり瀧の水三段と成て落ち其との段ハ松杉まつ杉等と一

て茂り下の段ハ深谷の下宮りみやに葦研あしけんの如し三雲の飛泉岩
 小當つて散亂一宛然霧雨の如し因て霧障きりかきの名有りは飛泉
 小を氏ハコンテール氏と共に小日と費やし村を福しふくし字生
 為し来りしりども其く之と出せ小違あは福は僅小は四ツ
 小飛泉を掲げて瀑布の水勢を後學の人小示さんと為るの
 氏うぢは老澗心らうかんしんなれば初心の人ハ能あた筆さ小注さありハ益を
 得るを多からんり

曉齋畫談外編卷之二畢

明治二十年六月廿八日出版版權御願
同 年七月六日版權御許可

小石川區小石川指ヶ谷町七拾三番地士族

編輯者

瓜生政和

本郷區湯島四丁目廿二番地平民

画工人

曉齋

河鍋洞郁

淺草區聖天横町二拾六番地平民

出版人

岩本俊

大坂心齋橋 松村九兵衛

全南久室寺町 前川善兵衛

諸 全本町四丁目 岡島真七

西京 藤井孫兵衛

尾州名古屋町 片野東四郎

國 全 川瀨代助

美濃岐阜 三浦源助

書 加州金澤 近岡屋太平

越中富山 守川吉兵衛

肆 信州長野 西澤喜太郎

全 上田 伊藤甲造

全 松本 高見甚左工門

越後長岡 佐藤作平

越後長岡 目黒十郎

全 三條 樋口小左工門

諸 陸前仙台 伊勢屋安右工門

羽前山形 五十嵐太右工門

國 渡島函館 軒文堂

甲州山梨 内藤傳右工門

駿州靜岡 廣瀬市兵衛

書 上州高崎 煥乎堂

野州宇都宮 萬年屋忠兵衛

肆 上総東金 能勢多左工門

武州横濱 吉川伊兵衛

全 鴻ノ巣 長島為一郎

東京 島屋稻垣武八

肆	書	京	東
牧野吉兵衛	同 孝之助	山中市兵衛	博 聞 社
		岸田吟香	有 隣 堂
		吉川半七	小林欽次郎
			丸屋善七
			稲田佐兵衛
			須原鉄二
			大倉孫兵衛
			北畠茂兵衛

肆	書	京	東
高崎脩助	榑原友吉	別所平七	吉田久兵衛
		松崎半造	北澤伊八
		出雲寺万次郎	辻岡文助
			小林喜右工門
			石川治兵衛
			文學舎
			原亮三郎
			柳川梅次郎



